令和7年度第1回神戸市発達障害児（者）支援地域協議会代表者会 議事要旨

日時：令和7年7月24日（木）13時30分～15時

場所：センタープラザ西館6階 9号会議室

1. 議題

（1）発達障害児者支援事業について

- ① 発達の気になるこどもの相談支援体制充実に向けた取り組み
- ② 特別支援教育の充実
- ③ 障害児通所支援事業所巡回支援事業
神戸市地域障害児支援体制強化事業
- ④ 神戸市における就労支援事業
- ⑤ ひきこもり支援室の取り組み
- ⑥ 神戸市精神保健福祉対策の強化について
- ⑦ 発達障害者支援センターの事業実施状況

（2）情報提供

- ① 障害者の雇用状況と実施事業
- ② 障害者の就労支援実施状況

2. 主な意見

（1）発達障害者支援事業について

- ・通所支援で、巡回支援をしているが数が多く回り切らないということだが、通所支援事業所同士のネットワークをつくって、相互に訪問するなどの仕組みはできないか。
- ・通所事業所の連携というところで、神戸市でも相談支援機関を充実させるような補助施策も進めていると聞いているが、効果や進捗はどうなっているか。
- ・相談支援事業所の役割として最初のプランをつくるだけでなく、プランをつくってどこかの事業所に行くことができた後の相談が継続されていない。相談支援事業所の機能として、相談員の技量や役割を高めていってほしい。
- ・特別支援教育の充実ということで、施設数が増えて拡充されていることは理解できたが、もう一方で、発達障害の傾向は誰もが持っているのだから、少し変わっていても抱えていけるような教員の養成が大事なのではないかと思う。ちょっと手に余ると発達障害とすることがいいのだろうか。インクルージョンということを考えれば、特別支援学級や特別支援学校をつくっていくことではなくて、どうやってインクルーズしていくかということだと思うので、教員の力量を高めていくことも考えてほしい。
- ・障害者雇用等で就職されて、そこで不適合というのは結構起こり得る。定着のための支援は就労移行支援事業所は3年だと思うが、やむを得ず離職した後に相談支援事業所が継続して繋がっていれば、事業所に相談に行こうとなるので、相談支援事業所の機能を高めていかないといけないと思う。

- ・高校の通級指導教室は、担当者が4名で巡回とあるが、巡回の対象校が4校なのであれば自校通級ができるのではないかと。自校通級を高校でもしていただきたい。
- ・いぶき明生支援学校の人数がどんどん増えているが、全国的な傾向としても養護学校・支援学校は増えている。増えている子供たちの特性に何か変化があるのか。どういう傾向の子供が増えているのか。インクルーシブ、インクルージョンという視点では、支援学校の生徒がどんどん増えていくというのは、社会の流れと違うのではないかと印象を持つ。
- ・発達障害や自閉スペクトラム症の子供の場合、ゲームやYouTubeなどの依存というのが多い気がするが、そのような相談はあるのか。
- ・神戸市でゲーム依存の学童期、思春期の年齢の子供の相談に乗ってもらえる場所はあるのか。
- ・ゲーム依存の中で発達障害の場合、ネットで対戦相手がいて相手の子に振り回される形で夜もゲームというのが一番危ないケースで、特に学童期から思春期のゲーム依存対策を立ててもらいたい。
- ・メタバースを使った就労支援は、リアルな場所には行けない方にとっては有効と感じている。リアルな場に行けるようになるには後押しが必要。本人の自己理解や社会に出る不安なども課題。教育の段階からも苦手なことだけでなく自分の強みを見つけていき、大人になったときに、試せる場所が増えてくれば、もっと働ける方が増えるのではないかと感じている。
- ・しごとサポートでは、3年間の就労サポートが終わった後もプラス3年間位追いかけてサポートしているが、その中で色々な事例が挙がってくる。義務教育プラスアルファの守られた学生生活から社会に出たあとの10年で傷つくことが多いと感じる。そのサポートができるようなスキームがあれば、連携した支援ができるのではないかと。

(2) 意見交換

【欠席委員からの意見】

- ・各学校の中で発達の特性を持つ児童生徒に対して、どのように指導されているのか。
- ・学校支援チームがどのような人材(体制)で、どのように回るのか。年に1回の訪問や助言だけでなく、数か月後の成果を確認するなど、各学校の特別支援教育コーディネーターを応援できる体制が望まれる。
- ・通級指導は、週に1回など利用に制限があると聞いているがどうか。多様な子どもの学びの確保のために十分な支援体制、人材の確保が必要。
- ・高校通級の対象者(20名・4校)に対する支援体制、具体的な支援内容を示してほしい。
- ・全日制の普通科高校でうまく行かず、退学して通信制サポート校へ行く子供も多い。全日制普通科高校での発達障害についての理解が十分ではない印象を受けている。受け入れ体制が課題と考える。
- ・児童発達支援センターが実施する地域の事業所向け研修に参加する機関に偏りがいないか。研修に参加しない機関があるとすれば、来てもらうような工夫が必要。

- ・障害者の雇用推進員については、企業への働きかけという意味では非常に意義があつてありがたい。
- ・大学では就活に向けての支援が行われているとのことだが、高校生年代の療育やS S Tを提供できるところをあまり聞かない。青年期・成人期への支援の充実が求められる。

【代表者会での意見】

- ・発達障害者の相談窓口は拡充されていると思うが、相談を受ける以上、窓口では答えられない場合は、どこに聞けばいいかという事まで教えてほしい。窓口の相談員で難しかったら、神戸市の正規職員を配置するなどしてもらいたい。
- ・親の会が言うLDや発達障害というのは、いわゆる医療モデルで言うところのLDではなく、文科省とか研究者が言っているようなLDの理解を深めたいと活動している。でも現場で感じるのは、研究者や親たちが訴えていることと、ちょっと違うという話はよく出る。特別支援教育と言うと支援学級に行っている子供たちが対象みたいなどころがあつて、グレーゾーンや通常学級で困っている子供たちの支援は、なかなかないと感じている。
- ・グレーゾーンやLDなど、学習とか教育の場面でどういう支援が必要なのか細かく評価できるところが本当に少ない。
- ・5歳児健診をすること自体が大事ではなくて、後にどう繋ぐかが大事だが、現実はあるかしないかだけで話が進んでいると思う。するしないだけで話が進んでいくと、やってみただけが次に繋がらなかつたらやめようという発想になるのではないか。学齢期のときに、自分ができないとか、自信がないままで社会に出たときの弊害は大きいので、専門家チームや教育相談でシステムをつくって、学校に繋いでもらいたい。
- ・小児科医としては5歳児健診については、一般健康診断的に各かかりつけ医で診て、問診等で発達について問題がありそうな子は、行政に診察した結果を申し送りし、行政でカンファレンスをして、家族へアプローチするというような形で、発達障害を見逃さないような方向性で、まだ決定ではないが、発達健診、それに対するフォローアップも含め、個別健診という形で、話し合っているところ。
- ・神戸市では、地域の開業医の先生が相談・疑問に答えられるような仕組みを5歳健診を利用してつくりたいという方向なので、地域の中で発達などに対して相談できる医師を増やそうという一歩かと思っている。
- ・強度行動障害の人は発達障害も抱えているので、児童期からの対応を考えていかないといけない。中学・高校で大暴れしたり、自傷行為があつたときに精神科でできることは、薬を出すか短期的に入院という形しかない。地域でどのように支援していくか、短期集中支援や入所支援など施策的にどうしていくのか考えないといけない。
- ・神戸市内に就ポツ（障害者就業・生活支援センター）は1か所だが、他の地域で事業所で就ポツを持っているところがあるが、就労の色々な支援はあるけど、生活のことは何も聞いてくれない、就ポツの役割って一体何だろうという話があつた。就ポツに対しては就労だけではなく生活も支援強化してもらえるように指導をしてほしい。
- ・一般小児科開業医としてずっと思っていることだが、相談支援事業所の相談員の機能を

高める必要性とか、学校の教員の力量を高める必要性とか、一般小児科開業医も医の技量を高めていかないといけないと思っている。各地域での療育センターと開業医との事例検討会の試みも始めてもらえたらありがたい。

- ・放課後デイの安全や指導のレベルについて、監視の目がないうまま増え続けているのが、心配。事業所同士の地域での交流とか、事例検討を題材に集まれるような、顔の見える地域の連携が福祉には全て必要なのではないかと思う。
- ・高次脳機能障害の中で、左半球障害の場合は失語症のような言語の問題を持つので比較的分かりやすいが、右半球障害の場合は、空気が読めない、人の気持ちが分かりづらいと一見自閉的な要素に見えるようなものがあって、孤立しやすい人たちが出てきていて、就労面での扱いが気になっている。
- ・発達障害は医療モデルと社会モデルという考え方がある。今はクローズで働ける人が増えたと思う。その理由はメタバースもそうだが、リモートワークであったり、テクノロジーの発達によって働き方が広がり、クローズで生きやすくなったというのを実感している。教育というモデルの中だと障害になっても、働くということでは障害にならないということ、10年前よりも感じている。教育が変わっていくことも必要。子供たちは障害という枠にはまらずに色々な選択肢が出るのではないかというのを感じている。
- ・生成AIと相性が良いという人が増えていると思う。これで自分の障害をカバーできるように感じるという10代の人も増えている。教育の場面でも、もっと使いこなせると彼らの良さが武器となり、苦手なことはAIでカバーできる可能性があるので、「学ぶ」と「働く」というのをうまく連動できるように、生成AIもうまく使えると良いと思う。

【閉会後に事務局に寄せられた追加意見】

- ・障害をもつ生徒がオープン又はクローズで就職を考えることについて、障害者（その家族を含めて）が自身の傾向性について認識したうえで意思決定することの重要性を前提として、自身の傾向性について認識がなく結果的にクローズで社会に出て、大きな違和感や生きづらさに直面する事例（選択されていないクローズ）もあることは認識しておく必要がある。
- ・市立高校（4校）などでの通級制度について、通級の拡大は障害をもつ生徒（その傾向性を持つ生徒）の普通科選択の傾向が出てきている証左でもあると思う。学校での学びは進路選択という形で最終的には生徒それぞれが、社会の中で自分の最適な居場所（仕事や進学）を獲得していく手段でもある。支援学校に蓄積された障害をもつ生徒への進路指導のノウハウを普通科高校の進路指導担当に共有していくことが必要になってくるのではないか。
- ・神戸市発達障害者支援センターが福祉局のなかのセンターになり職員も3名になってしまったことは残念。例えば神戸市の職員の中で発達障害のことに関心がありその仕事をやってみたいと思える人や専門職の職員を増やして欲しい。
- ・中高生の時は通常級や通級指導教室を利用することが多く、放課後デイサービスなどの福祉サービスを利用することが少ない。過剰適応や二次障害を防ぐため、診断されていな

- くても保護者が子どもの特性に困っている時に適切に対応できる人材や窓口が必要。
- ・発達障害者相談窓口は丁寧なアセスメントをできる余裕がある職員配置なのか。また、発達障害者相談窓口で対応が難しいケースの対応など、時には直接支援やSV機能も備えた発達障害者支援センターであってほしい。